

本「ふるさと歴史探訪記」は、高瀬俊英氏に執筆をお願いし、
広報ひだに連載されてきたものを、連続編集したものです。

ふるさと歴史探訪記 1

高瀬 俊英

歩くと肥田の歴史がわかる

平成七年、肥田町史が刊行されました。これを契機に「まちづくり委員会」が組織され、歩くと肥田の歴史がわかるようにと高札風の木札に墨書のポイント表示が行われました。肥田の歴史を学ぶと訪問者も増えてきましたことから、その後、説明文を書いたプレートをつける改良も行われました。

しかし、二十年近い歳月が経過しますと、



風雨により木材は朽ち、墨書も薄くなつて非常に残念な状態になってしまいました。
このため、耐久性のあるプラスチックとスチールの立て看板に一新することとなりました。

立て看板の位置はどこが適当か

- ① 城下町肥田、② 宇曾川船着場、③ 万葉歌碑
 - ④ 道場屋敷（旧小字名）、⑤ 水攻め堤
 - ⑥ 肥田西遺跡、⑦ 「塚乞手」周溝遺跡、⑧ 肥田城址
 - ⑨ 山王（旧小字名）、⑩ 同上、⑪ 愛親塾学校跡
 - ⑫ 肥田を取りまく土塁、⑬ 土塁と馬道
 - ⑭ 「北墓立」遺跡、⑮ 歴史資料館
- 新たに設置したい場所等があればご提案ください。

土塁の説明文を訂正します

肥田を取りまく約八百mの土塁の起源を次のように訂正します。

「戦国期、城や城下町を守る土塁といわれてきたが、その後の調査で、江戸期洪水対策として築かれたようである。（百々町は石積みによる家の地上げがなされている。）」

土塁の処々には牛馬が進めるように馬道（めどう）が設けられています。水害を防ぐ土塁ということから、その部分に頑丈な板で堰をつくるよう工夫されています。

大家勝治氏宅前や大村吉継氏宅南側の里道などに名残が見られます。肥田町では、堰のことを「メンド」とも呼んでいます。



ふるさと歴史探訪記 2

高瀬 俊 英

「小字名」が歴史的遺産

肥田町まちおこし推進協議会(自治会)では、先の広報でお知らせしたとおり、木製立看板十五本をスチール製(三津、旗屋謹製)に更新しました。私たちが日常的に使っている東町、西町、登町は現在も肥田に残る小字名です。この小字名や西肥田地区の小字名も含めて、肥田には約九十の小字名がありました。つい最近まで、私達は互いに

小字名を使って、その位置を確かめあいました。

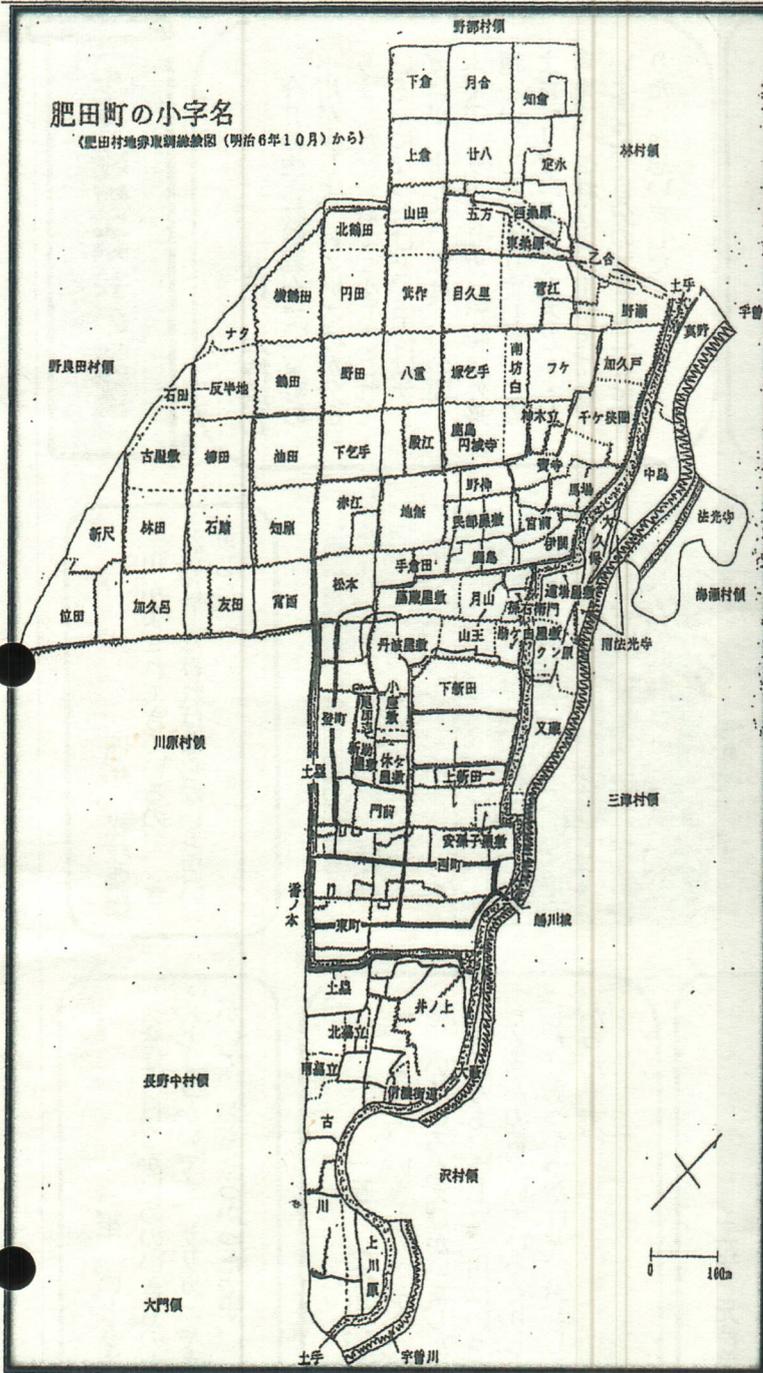
ところが、肥田の地表が一変した圃場整備完成以降は、小字名で呼ぶ機会も少なくなり、急激に脳裏から消え去ろうとしています。時代の変遷、諸行無常の習い、いたし方がありません。

「小字名」の誕生はいつか

千三百年前にさかのぼります。奈良時代前、中国の唐の制度を習い、大和朝廷が都とともに耕地の区画を行いました。旧の彦根市地域に先駆け、エチ、犬上では、耕地を六町(約六五四巴)間隔で

縦横に区切り、六町間隔の列を「条」、六町平方の区画を「里」と呼び、一里はさらに一町(約一〇九巴)間隔で縦横に区切って一坪(三六坪)とし、近江国エチ郡〇条〇里〇坪と呼ぶことで、地点の指示を明確にしました。(条里制といふ)

この、それぞれの地点に人が住み始めると、一坪位を単位(変形の場合もある)に愛称がつけられました。例えば、西肥田から肥田へ向かう県道の右側は、山田、築作、八重、殿江、地無、手倉田などです。名付け理由が分かりそうな小字名としては、神木立、賽寺、官前、馬場、法光寺、伊関、鹿島、道場屋敷などがあります。



肥田町の小字名

(肥田村地帯東朝編地図(明治6年10月)から)



道場屋敷

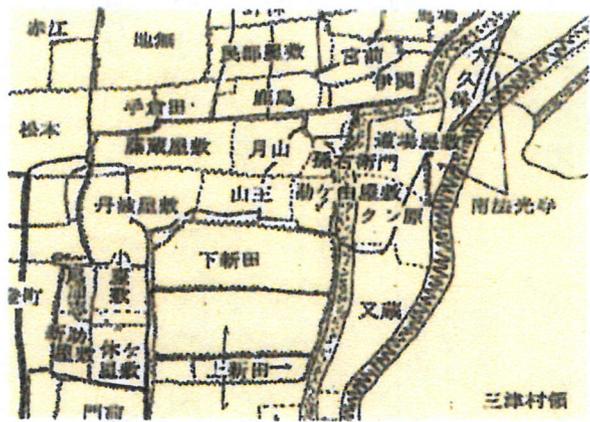
ふるさと歴史探訪記 3

高瀬俊英

肥田城はどの辺りに

肥田への訪問者が必ずしも城マニアでなくても、お城はどの辺りにあったかとよく問われます。

そこで、県道から城址公園に向かう入口に立つ「肥田城跡」の石碑の傍らの立看板に、「県道から宇曾川堤防まで約200m、南にある公民館の方へ約200m、約四ヘクタールの平地に室町時代、城が築かれ、沼地なども存在した。江戸初期に開墾されて、『新田』となる。」と記載されている旨を伝えていきます。



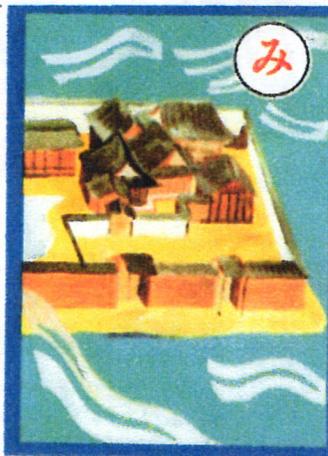
江戸時代の初め、慶安三年(一六五〇年)、肥田城は彦根藩によって取り壊されたという記録があります。「堤をこぼち、堀を埋め、土石を運び、開墾して新田三町五反九畝十七歩を得た」と書かれています。彦根城は徳川幕府による普請で築城されましたが、彦根城に使えるものは各地から調達されたので、大石などは宇曾川を船で彦根へ運ばれたこととでしょう。また、三町五反云々は、旧小字名「上新田」「下新田」の合計面積とほぼ一致していますし、肥田城のあった場所と違って間違いないと思われま

周りには武家屋敷が

肥田城を取り囲むようにして武家屋敷跡らしい小字名がいくつも残っています。

「民部屋敷」の民部というのは官職名で、城主高野瀬秀隆の息子隆景が民部大輔を名乗り、関係がありそうです。「丹波屋敷」は、高野瀬の家臣に久木丹波左那がおり、福井で秀隆に従って殉死した人に関係がありそうで、久木氏の屋敷ではないかと思えます。「勘ヶ由屋敷」は、高野瀬氏の家臣に藤野勘解由がおり、藤野氏の屋敷のようです。

室町時代の武家屋敷は、それ自体が戦闘に備えた要素をもっており、城の補強にも役立ちました。



水攻めの歴史にのこる 肥田城址 (彦根かるたより)

室町後半は民衆の力が高揚した

室町時代後半は戦国時代に入り、各地で戦争が絶えませんでした。その間にも、民衆はたゆまぬ努力によって、二毛作を普及したり牛馬による耕作等により、農業の生産力を高めていきました。

領主やその家臣たちが戦争のため駆け巡っている間に、団結して「惣そと」といった自治組織をつくる村も現れました。

また、領主に対し、年貢供出と引き換えに盗賊からの生命や生活の保護を要求したり、金貸しからの借金棒引きなども要求しています。(徳政一揆)

肥田城が水攻めを受けたとき、民衆の多くが城中に避難している様子が、江戸時代の書物「淡海小間撰(おうみこまざらひ)」に書かれています。

ふるさと歴史探訪記 4

高瀬 俊英

肥田城水攻めの顛末

近江の守護大名は六角氏でしたが、湖北に戦国の大名、浅井氏が力をもち始めると、それになびく国人、土豪が湖東にも現れました。

六角氏はそれを懲らしめるために、肥田城主、高野瀬秀隆に対し、以下、近江小間様から。

「屋形（六角氏）父子謀計ヲ回ラシ玉ヒテ、中ノ人夫ヲ以、廻リ五十八丁、横十三間二堤ヲ築、宇曾川愛知川ヲ始トシ、諸川ヨリ水ヲ仕懸、永祿二歳四月二日ヨリ当城ヲ水攻ニシ玉フ」

「次第一水増、城一里四方ハ、悉、大海ト成、城中大ニ歎難ニ及ヒ、上下男泣サケヒ、臍魂モ消果、目モ当ラレヌ有様ナリ」

肥田城はまさに水没寸前にして助かり、そこへ小谷城からの浅井の援軍がやってくる。六角軍を退かせたようです。

野良田表のたたかい

～まさに肥田が主戦場～

肥田城の水攻めに失敗した六角義賢は、再び軍備を整え、翌永祿三年（一一六〇年）八月、一万五千の兵を率いて肥田城に押し寄せました。

急を知った浅井軍もこれに対抗して一万一千余の兵を肥田城近くに配置し、宇曾川を隔てて対陣しました。

「表」は東方を意味し、まさに肥田川原、出町辺りが主戦場だったようです。

八月中旬巳の刻（午前十時）、北軍浅井氏の先陣百々内蔵助が手兵を率いて、南軍六角氏に攻めかかり、南軍の先陣蒲生賢秀は激しく応戦しました。激闘およそ二時間の後、南軍の二陣禮崎、田中の軍勢が不意に横手から迫ったため、北軍は後退することになりました。百々内蔵助は、先陣の名譽を汚すまいと獅子奮迅しましたが、瀕死の重傷を負って、翌年死亡しました。

勝ち誇った南軍を見て、北軍の総大将浅井長政は安養寺三郎左衛門と今村掃部助とを傍らに呼び寄せ、「敵の先陣は勝ちおこっているとはいえ、殊の外疲れている様子である。機を見て、精兵をもって突撃すれば、必ず狼狽するであろう。われは敵の動揺する隙をみて本陣を

切り崩さん。」と下知し、味方を二手に分け、敵の先陣蒲生の軍に当らせると、南軍はたちまち押し返され、算を乱して背走しました。この混乱に乗じ、長政は自らも精兵を率いて、義賢の本陣に殺到すると、義賢は大敗し、南に向かって潰走したと「江濃記」（群書類従）は伝えています。

さらに付け加えて、この合戦における南軍の死傷者は九百二十人、北軍も七百余の死傷者をだし、火災もおこり、宇曾川南の平野は惨憺たる光景であったといえます。

川原村の出町を百々町と呼称していますが、証拠はないものの、負傷して苦しむ鳥居本の城主百々内蔵助を村人が介抱したことに因んでつけられたのではないのでしょうか。



野良田町若宮神社境内より

ふるさと歴史探訪記 5

高瀬俊英

永祿の戦いのあと

水攻めによる籠城と火攻めによる野戦よって、宇曾川南の平野（まさに肥田の在所）は惨憺たる光景だったようです。

その一例

長楽寺文書「法光山縁起」によると、長楽寺は、天平の昔（七四〇年）、僧行基が開いた毘尼寺で、昔は小字賽寺（びんてら）にあつて、寺が荒れたのを惜しんで、仏眼禪師が弘安元年（一二七八年）に再興し、賽光寺として栄えていたところ、永祿の合戦で兵火のため焼けてしまい、本尊仏も行方不明になったと書かれています。



続いて、同縁起は、慶長六年（一六〇一年）、登町の住人、信阿弥、幸阿弥父子の夢枕に一人の僧があらわれ、「吾は毘尼寺（＝賽寺）辺りに住まいせざる者なれど、土中に埋もれて久しく、為に度生の願い欠けり、汝、吾をして世に出でしめ、所願を全うさせよ」と告げました。住人父子が肥田の古老に話をすると、古老は賽寺には大仏さまがおられたことを覚えていて、そこを掘ったところ、土中から尊像を発見したので、一同喜んで仮堂に安置し、供養したと伝えていきます。（戦火を避けるために、住民の誰かが土中に埋めて罹災を免れた例は湖北地方でも見られています。）

江戸期になると、長楽寺は現在地に移転し、鎌倉から来た松嶺和尚、享保一五年（一七三〇年）要山禪師、明和七年（一七七六年）宗建禪師らが長楽寺を復興され、本尊像（現薬師如来像）も修理されたとされています。

崇徳寺にも永祿の戦いを描いた屏風、「肥田表合戦屏風」があります。制作者は元豊会館長岡孝寛氏で、「群書類従」にも詳しく、崇徳寺を始めとして肥田の各所から火の手が上がっている様子が描かれています。

崇徳寺も昔は小字山王、丹波屋敷付近にあり、発掘調査の結果、土中から焼土や焼瓦が発掘されていますし、江戸期になつて井伊家の援助で現在の位置に移転したとの記録もあります。

崇徳寺にある城主の石碑、一緒にある石地藏の中には、一石に二体、三体ある地藏彫刻が幾つもみられますが、これらは何を物語っているのでしょうか。



野良田表の合戦で犠牲者が大量に出たことは前掲しました。肥田の上田（かみ）に小字北墓立、南墓立があり、その遺跡地ではないかと注目されましたが、出土品はありませんでした。（北墓立の地底からは、さらに古い時代、奈良時代以後の貴重な文化財の発掘をみました。）

ふるさと歴史探訪記 6

高瀬 俊 英

高野瀬氏、織田勢に与し自滅

肥田城の水攻めや野良田表の合戦など、永祿の戦いで、高野瀬氏は勝つには勝ちましたが、損害は甚大でした。

それから十二年後の天正二年（一五七四年）、高野瀬氏は柴田勝家に従つて越前（福井）へ行き、浅井から織田に主君を乗り換え、安居（あんこう）現福井市の旧西安居村、東安居地区を指し、安居城跡は東安居地区にあります。この地で、信長に率兵した本願寺頭如の一揆軍と戦つて敗れ、敗戦の責任をとつて秀隆、隆景親子は自刃（四月十一日）しています。翌日、家来も殉死し、ここに高野瀬氏は滅びることとなりました。

織田信長に刃向かう者は撫で斬り

一方、織田信長は永祿十年（一五六八年）に齋藤龍興の稲葉山城を攻略し、地名を岐阜と改名しますが、翌年には京都に上つて禁裏（天皇の館）を安堵し、永祿十二年（一五七〇年）には再び入京して室町幕府の將軍、足利義昭に加勢し、二条城を造営します。越前の朝倉や近江の浅井とは戦いを続けています。

ところが、天正元年（一五七三年）、足利義昭は、甲斐の武田信玄や本願寺光佐（願如）、越前の朝倉義景、近江の浅井長政らと連携し、信長の追討を謀ります。

これに対し信長は、二年前には、延暦寺が朝倉を支援したため、比叡山一帯を焼き討ちしていますが、天正三年（一五七五年）には上京して將軍を追い、ついに室町幕府を滅ぼします。

信長は、願如の一揆軍と和睦することもありましたが、この後、安土城が完成する天正七年（一五七九年）頃まで戦いが続きます。

高野瀬氏亡きあと肥田は

高野瀬氏が滅んだ後、信長は、肥田城に美濃武士だった蜂谷頼隆を送り込み、肥田城を整備させます。

天正五年（一五七七年）には、二月十日と九月二十九日、軍団を連れて根来（ねごろ）討伐に往復する信長の子、信忠が肥田城に一泊している記録があり、肥田城とその城下町の建設も相当進んでいたことが想像できます。

（編集者注）

左記肖像画は崇徳寺に保管されているものですが、その原画は、彦根市指定文化財に指定され、彦根城博物館に保管されています。肥田の歴史を証明する貴重な史料です。



高野瀬秀隆像（崇徳寺所蔵）



蜂谷頼隆像（崇徳寺所蔵）

ふるさと歴史探訪記 7

高瀬 俊英

室町時代後半は、日本全国、武力で
もって優劣を決める動乱の時代でし
た。特に、城があつたり武士がたむろ
する地域は戦乱に明け暮れていまし
た。「肥田」もそうでした。(先号まで
を参照)

信長

戦国の争乱を終わらせ、全国統一の
端を開いたのは信長でした。彼は、畿
内地方に残存する室町幕府の守護の権
力と、それと結ぶ寺社の古い勢力抑え
(粉砕し)、地方に割拠する戦国大名を
征服し、農民を統制し、都市と商業を
支配下に入れる最中、京都の本能寺で
倒されました。

秀吉

跡を継いだのが秀吉で、検地と刀狩
りの実施で兵農分離を進め、武士階級
をして農民、町人を支配する統一支配
を完成させました。自己の偉業を誇示
するために、天守のある豪華雄大な城
を造り、工芸品や障壁画は豪華絢爛を
極めました。(高野瀬氏の後、肥田へ来
た蜂屋氏、長谷川氏もこの系統の武將
ですし、肥田でも天守のある城が造ら
れたのではないかと考えます。)

家康

秀吉の死(一五九八年)後、家臣間の
分裂を利用して一挙に支配を確立しよ
うとしたのが家康で、一六〇〇年の関ヶ
原の戦いで豊臣方を敗り、一六〇二年に
征夷大將軍となつて江戸幕府を開きま
した。二代將軍家光のとき、幕府の基礎
は整い、強固な封建支配体制が完成し
ました。

彦根藩に組み入れられた肥田

駿河の国井伊谷出身の井伊家は、松平
家(後の徳川家)を支える有力な家臣で
した。井伊氏は、関ヶ原の戦い以後、近
江の伊香から近江八幡の西、仁保川付近
まで領有し、彦根には幕府普請の彦根城
と城下町が造られました。肥田からも、
旧肥田城の全てと武士や商人手工業者
らが城下町に集められ、肥田には、農民
となつた働き手が残りました。

彦根藩は、北筋、中筋、南筋の区域に
分けられ、肥田は南筋区域、南筋奉行(宇
曾川付近から南の地域を管轄)の支配下
に入ることになりました。

課題のお願い

安土(信長)、桃山(秀吉)、江戸(家
康)時代、肥田で造られ、今も残ってい
る建物や品物を挙げてみてください。見
つかればお知らせいただきたいと思ひ
ます。



(注) 右図は崇徳寺に保管されている
江戸時代の知行図の一部で、伊香、浅
井から愛知、神崎までの群絵図のうち
南筋奉行の区域を示したものです。宇
曾川以南の地域が示されています。他
に北筋区域を示すもの、中筋区域を示
すものがある、三枚で構成されてい
ます。関心のある方は崇徳寺まで

ふるさと歴史探訪記 8

高瀬俊英

毎年二月二十五日は釈迦の命日です。釈迦の亡くなる寸前の教えが「遺教経」として残されています。その中に、「常に無常の理(ことわり)を(伝)わ(す)る(こ)と勿(な)かれ」と述べています。「無常の理」とは、この世の中に永遠に続くものは「皆無」で、全てが「流転(るてん)する」というものです。

人間の歴史も自然の歴史も全て同じで、どれほど立派な邸宅も、数千年もたてば土に埋もれてしまう運命にあります。それでも、人間は値打ちのあるものは後世に残そうと努力します。行政も文化財を担当する組織をつくり、これを援助しています。

肥田町では文化財として援助を受けているもの(彦根市指定文化財)が現在三件あります。

- ① 崇徳寺の本尊(昭和60年8月1日指定) 鎌倉期の作品
 - ② 同じく肥田城主肖像画四幅(平成18年2月23日指定) 桃山期
 - ③ 青柳氏住宅の旧鹿島邸古民家(平成22年3月16日指定) 江戸期
- ①については、平成11年専門家から彫刻の鑿(う)ひだ(が)が崩れかけており、今直さないとという指摘があつて、それに従いました。京都博物館内に美術院という専門の修理所があり、見積もりを取ると約四百万円。市指定文化財ということで三分の二の補助(当時)がありました。残

りは所有者負担、かなりの大金でしたが、地元の皆さまに「写経」やカンパで「援助をいただき、半年間入院、解体後は、元どおり凝固した後、三、四百年は大丈夫とお墨付きをいただきました。」

仏像の胎内には、元禄五年に修理したという墨書があり、それから現在では三百年余たっています。空気に触れている仏像は三、四百年が寿命ということになります。毎年一月二十一日(法隆寺の火災日)は文化財防火デーで、この前後に崇徳寺も消防署からの点検や、消火訓練が行われています。



木造菩薩形坐像

②については、現在、彦根城博物館で保管してもらっていますが、四幅とも絹張りで四百年以上たつていて、糸のほつれも激しく、修理しないかと言われています。見積もつてもらつたところ、四幅で八百万円かかるとのこと。市からの補助が現在二分の一で、所有者は四百万円の負担、二の足を踏みかねているのが現状です。

③については、現地に行くとい目瞭然、古民家が体験でき、またとない教材です。しかし、①②と比べて規模が大きいだけに、元どおりに維持管理するのは大変です。幸い持ち主が木工施工にたけておられる方だけに、原型を

崩さないよう修理をされますが、自力補修ですので、市からの補助も滞るとい矛盾もおこっています。また、表通りに市製作の「古民家」という案内板がないのも改善されるべきです。



肥田城主肖像画



旧鹿島邸

安土、桃山、江戸、明治の各時代、肥田で造られ、今も残っている建物や物品は他にも多々あります。まず文化財的価値をみつけて「指定文化財」として登録させたいものです。

ふるさと歴史探訪記 9

高瀬 俊 英

圃場整備前の最後の発掘で

平成十九年度、二十年度は小字山王及び南側の小字丹波屋敷―薩摩かず子邸の東側において最後の発掘調査が行われました。

肥田からも藤野信一さんご夫妻、藤野良枝さん、川松芳子さん、大村国子さんが参加されました。

発掘参加者からお聞きした話ですが、地中の水たまりから金色に輝くメダルのようなものが発掘され、監督さん(調査員)が手に取ると、空気に触れたので褐色に変色したといいます。この物品は、三津町勝鳥神社が所有する彦根市の指定文化財、金銅製懸仏と同型のものでした。ほかに、五輪塔、卒塔婆、鉄製燭台、銅製飲食器など宗教的な色彩の強い遺物群が出土しています。また、茶の湯に使用するような天目茶碗や瓦質香炉といっ



染付皿



瀬戸美濃 天目茶碗



金銅製 懸仏

た趣味的なもの、生活用品なども多数出土し、さらに二次的な熱を受けた焼瓦、壁土も発掘されました。火災にあつた証拠です。(写真は県教育委員会が所蔵する肥田城出土遺物の一部です。)

そこが旧崇徳寺跡

古文書も

「肥田村宗(ママ) 徳寺屋敷在所中に御座候付而かたはしへ出し申替え地之事」

資料館にあつたこの文書には、承応元年(一六五二年) 崇徳寺領のあつた小字名と面積が書かれています。小字丹波屋敷などに四反五歩、小字門前に四反拾歩と二畝の土地(一畝は墓地)とあり、肥田庄屋善左衛門ほか住民五十一人の署名、捺印付きの文書です。

もう一つ資料館に、薩摩敬造家所有の肥田を描いた慶応二年(一八六六年) 作成の地図(写し)があります。そこにも「小字丹波屋敷」東側に「崇徳寺供御田」が描かれています。

その場所に昔崇徳寺屋敷(境内)があり、「かたはしへ出し替地」がしたいと書かれています。承応年間、崇徳寺の住職は松殿和尚でした。廃屋同然の中に仏ともいえるのを嘆き、寺社奉行に修繕の寄付集めを願ひ出る時に、肥田住民の署名、捺印した前掲の「かたはし」文書を付け提出したのでした。

面白いことに、時代が時代でしたから、「かたはし」文書はお上に対する直接の請願書ではなく、肥田庄屋、住民一同と崇徳寺の約束手形の書面になっていま

す。その後、井伊家二代目直孝から、開墾したばかりの上新田三反をはじめ種々の寄贈を受け、旧城の「かたはし」、小字上新田付近に堂々とした崇徳寺が再建されました。しかし、宝暦四年(一七五四年)の火災により、本堂、庫裏とも焼失し、今の崇徳寺の現在地ではなかつたようです。

《おことわり》

先号の記事で、釈迦の命日を二月二十五日としたのは誤植でした。正しくは二月十五日です。お詫びして訂正させていただきます。

釈迦の命日は「ねはん」ともいわれています。ちなみに二月二十五日は菅原道真(天神さま)の命日です。

ふるさと歴史探訪記 10

高瀬俊英

感染症と肥田の歴史

新型コロナウイルスの感染でうつつという日々が続いています。

今年五月十七日付けの朝日新聞、「疫病と日本人、戦いの物語」は詳しく疫病の歴史を紹介していました。

特徴的なことは、感染症は大昔からあり、主な感染症は起こり始めて二〜三千年続かないと治まらなかったということだと思います。

四千年前の鳥取県にある縄文遺跡からは、人骨から結核の痕跡が見つかっていますし、百年前に流行したスペイン風邪は、大正7〜9年の三年間猛威をふるい、国内で39万人、全世界で5千万人の人々が亡くなったといわれています。

二

奈良時代、肥田に住住し、近江大領(注1)を勤め、長野の大贖神社の境内にあったといわれる郡役所で仕事をしていた大友夜須麻呂が亡くなったのが天平十年九月、七三八年で、天然痘が大流行した七三五〜七三七年の翌年でした。この年、平城京で政治に携わっていた藤原四兄弟(注2)も相次いで死去するなど、人口の三割前後、全国で百万から百五十万人

の人々が亡くなったといわれています。七三四年には大地震に加え、旱魃や飢饉も起っていました。

中央と交流のあった大友夜須麻呂が天然痘に侵されて亡くなったのかどうかはわかりませんが、肥田もかなりの惨状だったと思います。夜須麻呂の生前の徳を崇めて住民が崇徳寺を建てたとありますが、仏をおまつりして惨状回復の祈願をしたのではないのでしょうか。

三

前掲の朝日新聞は、一八五八年(安政五年)コレラが流行して、江戸で十万人が死亡、一八六二年(文久二年)には、はしかが大流行して江戸で数万人が亡くなったとしています。江戸時代、一生に一度はかかる三疫病として、天然痘、はしか、水ぼうそうがあり、それらの克服のため涙ぐましい努力が語られています。ワクチンがなかった時代ですので、肥田でも例外はなかったと思います。

崇徳寺本堂南の墓地に肥田の各地から集められた石地蔵があります。一石に二体、二体の地蔵が彫られている石地蔵がありますが、感染症の犠牲者供養のものではないのでしょうか。

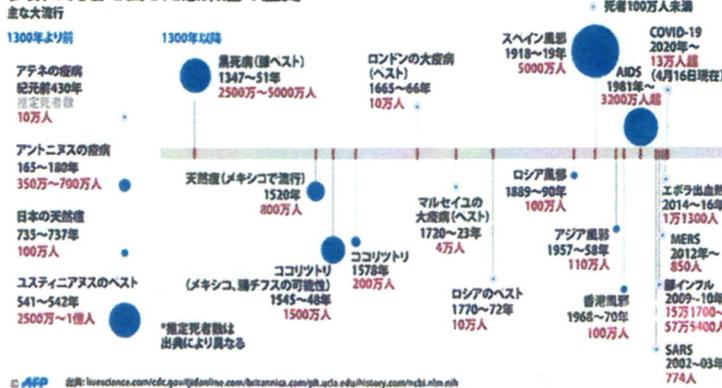
肥田上町の大太鼓は文久二年に造られたといわれています。文久二年というとはしか大流行期にあたり、平癒を願って肥田の住民は大太鼓を製作し、神にささげお祭りをしたのではないのでしょうか。

苦難の時期は必ず終わります。天然痘で苦しんだ奈良時代も、その後天平文化の華が開きました。江戸時代の疫病も、末期から明治にかけて武士のいない城下町で肥田は栄えました。

注1 律令制における職名の一つで、郡司の最高位

注2 奈良時代初期に持統・文武・元明・元正の四代天皇から絶大な信頼を得、官僚として有能だった藤原不比等(鎌足の子)の息子、武智麻呂(むちまろ)、房前(ふささき)、宇合(うまかい)、麻呂(まろ)のことをいう。

多数の死者を出した感染症の歴史



ふるさと歴史探訪記 11

高瀬 俊 英

肥田城はどいつに

「肥田町史」作成のころは肥田城跡の範囲がはっきりしていませんでした。小字山王、月山あたりに、昔、小高い地形であったところから、「見張り櫓」か「天守閣」があったのではないかという推測がなされていました。

その後、圃場整備前の文化財発掘調査が行われ、専門家の知見では、「肥田城跡」は小字新田（＝上新田、下新田の約三町六反）に絞られてきました。畔に立てられている営農組合表示立看のB地域あたりです。

相当に広い面積をもつ城跡です。江戸初期に廃城となった資材は、すっかり彦根へ、後は開墾されて新田に。しかし、地下埋蔵物の調査はまだ行われていません。かつて耕作者の方が言っておられた、「田の底深くに杭のようなものがある」とか、「畳一枚分の石が田の底にある」など、疑問は残ったままです。

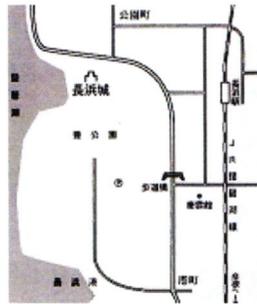


肥田城の立地、

どんな城だったのか

肥田城は平地に建てられた平城（ひらじょう）です。肥田でも一番低い土地に建てられた城でした。

（秀吉の建てた長浜城も平城で、一番低い湖岸に建っています。）



愛知川の伏流水、不飲川は東田堂西の不飲池を起点に来迎川へ、来迎川から分かれた伏流水は長野を通り肥田へ、宇曽川に流れ落ちていきます。その宇曽川堤防の側に、宇曽川を見下ろすように肥田城は建てられ、宇曽川の水は沼として城の周りに引き込まれていたと考えられます。（岩倉川＝吉田川の水を城内に取り入れた目加田城と同じ造りです。）

宇曽川をまたいで三津町に肥田城の支城、「越川城」も造られました。宇曽川の舟運にニラムミをきかせ、守りを固める城でした。

城造りの変遷

一五五八年（永祿二年）は肥田で合戦が行われた年です。日本への鉄砲伝来は

一五四三年（天文十二年）ですが、まだ鉄砲は使われていなかったようでした。城主高野瀬氏の時代は、肥田公民館の正面壁面に描かれているような木造造りの城、蜂屋氏、長谷川氏が城主の時代になると鉄砲に対応できる城、瓦、土壁、石垣などで固められた城が登場したと考えられます。



肥田城想像図（肥田町公民館 大広間正面壁面）

肥田にも天守をもつ土壁の城が存在していました。上段図は現長浜城。肥田にも廃城前にはこの類の城が建てられていました。

ふるさと歴史探訪記 12

高瀬 俊 英

肥田城下町は

安土桃山時代から始まります。

城主高野瀬氏の時代は、小字新田に城が築かれましたが、城の周りには武家屋敷、寺社、民家なども建っていました。(小字名が語っています。)上町や登町は、水に浮かぶ城よりも高地だったので、もちろん民家がありました。

それが、小字登町、西町、東町と「短冊形城下町」にまとまったのは、安土、近江八幡の城下町づくりに経験のある蜂屋頼隆が肥田城主となってからのことと考えられます。(天正三年＝一五七五年頃)

蜂屋頼隆について

頼隆は秀吉と同じく安土城内に屋敷をもつ信長の重臣で、安土城とその城下町建設にもかかわってきました。

頼隆は美濃出身で、京都の大徳寺で禅を学び、連歌師の里村紹巴(さとむらじようは)から連歌を学んだ人ですが、土木工事に長じ、信長や秀吉にも一目おかれていたといわれています。

頼隆は、信長亡きあと秀吉に従い、晩年は敦賀城主になりますが、一族は肥田に留まっていたようです。敦賀城主となった頼隆は、日本海から琵琶湖への運河

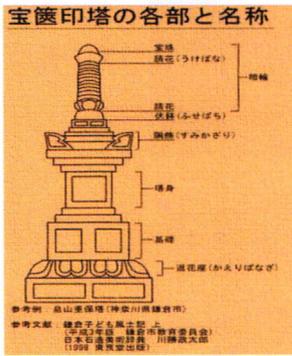
(水路)計画が狙いだったといわれています。

頼隆はここで他界しますが、跡継ぎに男子がなく、頼隆亡き後の肥田城主には越前東郷庄と合わせ領した六万五千石の長谷川秀一が就任しました。

崇徳寺の本尊聖観音座像(正しくは「大日如来坐像」)に、元禄五年、修理した旨の墨書記事があり、その中に、「蜂屋公尊崇の仏像」との記載がありますが、蜂屋氏が持参した仏像かどうかは不明です。

また、古くからある崇徳寺墓地には五輪塔や宝篋印塔(ほうきょういんとう)など墓

石がたぐざんあります。昭和の初め寺を訪問され



た「愛知郡史」の著者、中川泉三氏は、高野瀬氏代々とともに蜂屋頼隆、長谷川秀一の「墓在り」と確認の墨書を残していますが、昭和十三年、高野瀬氏末裔による宝篋印塔建設以来分からなくなりました。

愛知川右岸の東田堂と豊満の境に野間津池(不飲池)という池があって、その伏流水は清水が「長野」から「肥田」へ、宇曾川へ流れ落ちる水流を利用して裏川を造り、散在していた民家を集め肥田城下町を建設したのは蜂屋頼隆でした。

宇曾川こそ交易の要

西、東、登三町の中央には幅6m近い道路が造られました。が、離れている中山道や朝鮮人街道以外、肥田のまわりは所謂「田んぼ道」で、他地方との交易の中心は宇曾川(運送川)の水運でした。(川の側には、水運を取り仕切る肥田城が必要だったのです。)

廃城後栄えた城下町

江戸初期(慶安三年一六五〇年)、幕府の命令で城址は開墾され、「新田」になり、城の資材は武士と一緒に彦根に移り、肥田は庶民だけが生活する城下町になりました。(惣村)惣で防災つくったり、惣池をつくったりしました。

江戸時代から明治にかけての肥田は、もちろん農家もありましたが、手工業をもとにした商家が多く、米屋、酒屋、塩醬油屋、油屋、古着屋、駄菓子屋、材木屋、鉄釘屋、下駄屋、荒物(雑貨)屋、紙屋、蒟蒻(こんにやく)屋、薪炭屋、床屋、魚屋、竹屋。

藤野儀三郎店では、米、雑穀、菓子、果物、荒物、蒟蒻、薪炭などまとめて販売。うどんの飲食も。

だから、この頃、中山道、河瀬、金沢稲部などから通じる道を、いずれも「肥田街道」と呼んでいました。(三宅)長い間のお付き合い感謝します。

崇徳寺資料館の 今昔と将来

高瀬 俊英

崇徳寺資料館で来館者の記録をとりはじめてから二十年が経過する。県内は勿論、全国各地からの来訪者が記録されている。

京都府（京都市・宇治市・山科区・北区）、兵庫
県（神戸市・西宮市・伊丹市、大阪府（東成区・
高石市・摂津市・枚方市・東大阪市・高槻市・堺
市）、奈良県（奈良市・橿原市・大和高田市・桜
井市）、岐阜県（瑞浪市・関市・多治見市・美濃
加茂市・本巣郡、福井県（福井市・鯖江市）、石
川県（金沢市）、愛知県（名古屋市中区・一宮市・清
須町・海部郡・西春井郡、富山県（高岡市）、長
野県（千曲市）、静岡県（牧ノ原市）、三重県（伊
賀市）、岡山県（倉敷市）、広島県（広島市）、島
根県（奥出雲町）、東京都（江戸川区・世田谷区・
練馬区・港区・足立区・調布市）、神奈川県（横
浜市・足柄上郡開成町）、茨城県（竜ヶ崎市）、千
葉県（船橋市・市川市）、埼玉県（越谷市・川越
市・川口市）

人数にすると県内四六一名以上、県外一
八二名以上が来館している。

そもそもこの資料館は、最初は「肥田町
史」で取り上げた各資料（根拠）を後世に
残す目的で造営されたものだが、いまや肥田
の文化遺産を全国に発信する役割まで担っ
てきた。

当時、肥田町自治会は百万円の基金を提
供している。崇徳寺の付属物ではなく明ら
かに肥田町全体の「資料館」である。大切

に保存を続けたい。

前述のように、県内だけでなしに全国か
らの来館者が増加している。いままでも遠方
からの来館者に十分な対応ができていたか
どうか反省しなければならぬ。

寺も代替りをし英彦が住職に就任した。

今後寺の世話方の一人である成宮為夫が資
料館囑託となり、松村江梨子が資料館私設
学芸員として研修中である。

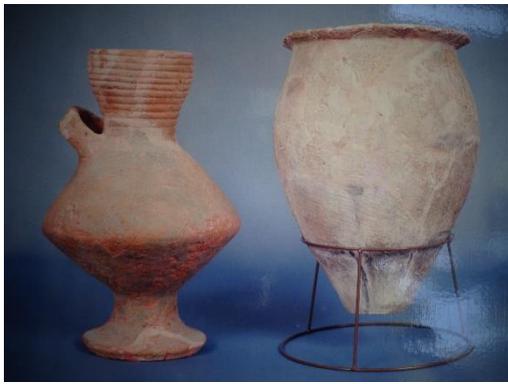
来館希望者へ

左記のいずれかに電話してくださいと
開館します。

崇徳寺	0749・43・4510
高瀬英彦	090・5043・3191
成宮為夫	090・3970・8002
松村江梨子	090・5168・1988

資料館展示物

聖泉大学敷地から出土した 弥生式土器



A・太古から中世へ

〈ケース〉太古の遺物、弥生式土器写真(実物は彦根城博物館)、崇徳寺中世文書
同寺過去帳等

壁：万葉歌碑、寶泰画師(すはたのえし)
長楽寺薬師、崇徳寺大日如来像

B・歴代の肥田城主

壁：城主画像四幅(写) 本物は彦根城博物館
で保管(市指定文化財)

C・古城・遺跡・遺物

〈ケース〉出土古銭、出土遺物、永祿戦乱記録
朝鮮通信正使扁額
朝鮮通信正使扁額
左デスク：圍場整備前発掘出土品写真(前
崇徳寺跡) 県埋蔵文化センター保管
壁：地券取調絵図(地籍図)
町周辺に残る土塁、ネルなど

D・江戸時代の村人たち

〈ケース〉各種古文書(お上に対して「恐れな
がら…」といひながら、ズバリも
のを言う村人や、年貢納入に工面し
ながら、生活上への意欲(水車や
エリ漁で)も読み取れる。
壁：船奉行による琵琶湖周辺実測図、上町
大太鼓、ネル

E・スポット近・現代

〈ケース〉集落の変遷、高橋の変遷、尋常小
学校以前の「愛親学校」関係文書
戦争期町内出征兵士の遺書など。
壁：綿野画伯「戦争と子供」三部作、彦根藩北
中、南筋別地図、肥田町史年表など。
(入口) 肥田で最も古い田畑図。

F・化石・珍石・能面

〈ケース〉化石、珍石あわせて数十種。江戸
末期「石の長者」といわれた木内
石亭(現草津市山田町)の遺品とも
能面は寄贈品。